Abhinavagupta の Paramārthasāra の研究

平　岡　昇

この書は、カシミールのアビナヴァグプタによつて十世紀後半より十一世紀にかけて作られたカシミールシヴァ派の哲学綱要書である。アビナヴァグプタは Utpalācārya の後継者であり Kṣemarāja の師である。この Kṣemarāja の弟子である Yogarāja によるこの書の注釈 Vivṛti が存在する。この書と同名の作品が Ādiśeṣa によつて書かれている。Ādiśeṣa の書と比較するとき、この学派の特徴は、用語の独特の用法にある。

まず世界開展次第を次の如く述べる。「śakti・māyā・prakṛti・pṛthvī といわれるこの四領域（andacatuṣṭayam）は、（神の）本来の能力の過大な広がりの故に、神（prabhu）によつて顕現される」（4）。と述べて、世界は、Paramaśiva の広がりであるとする。注釈において神（prabhu）は知（cit）と歓喜（ānanda）からなる大主宰神（Maheśvara）であり自立独立の最高シヴァ（Paramaśiva）であると定義する。次に aṇḍa に関してすべてを隠す性質の覆いという形をもつ真の本質（vastupiṇḍa）であるとする。第一に最高位の領域として śakti の領域を掲げる。それは最高の自己意識の喜びと一切の主客を思考するものの本性の否定であり、その作用は、否定的である。この領域は、36原理（tattva）のうち śaktitatva から sadvidyātattva までをしめ、Sadāśiva より Īśvara 神がこの領域の支配主である。第二の māyā の領域は māyātattva から puruṣa までをしめ、支配主は Rudra 神である。第三の prakṛti の領域は prakṛti より mahābhūta までをしめ、支配主は Viṣṇu 神である。第四の pṛthvī の領域は人間動植物界をしめ、支配主は Brahmā 神である。以上の如くこの書では aṇḍa は領域を示す用語である。しかし、Ādiśeṣa の場合は「未顕現（avyakta）より宇宙の卵（aṇḍa）が生じた。宇宙の卵より Brahmā 神が生じた。それより生類の創造がなされ、（創造主の）活動は、māyā の性質をそなえ、この（創造）は（逆に）再び順次に帰吸されるのである」（S. 10）として aṇḍa を宇宙の卵と解釈しているようである。次に経験主体及び客体としてのシヴァ神が述べられる「この四領域のなかに種々の肉体、器官、存在領域とつらなるこの世界がある。そこで実にシヴァは肉体の享受者になり個我の様相を託す」（5）と述べる。次に世界開展に関して顕現説（ābhāsavāda）及び映像説（pratibimbavāda）をもつて説明する。しかし、この派の注目すべき点は現象世界を偽わりの世界と解釈せず真実の世界と解釈するところにある。これはシヴァの観念作用である ābhāsa が偽りであるはずがないというところに起因しているのである。「汚れなき水晶が種々の色あるものの様相を託すのと同様に、主宰神（īśa）もその様に、神・人間・動物・樹木の形態をとる」（6）ここでは Ādiśeṣa の二行目と異なる。「……同様に、遍満するもの（vibhu）は、guṇa によつて生みだされた添性（upādhi）の性質をとる」（S. 16）この相違は、アビナヴァグプタの方がより発展した概念を示していると理解される点である。次に「水面が動くときに月影が動き（水面が）静止すると

きに（月影が）静止する、この様に肉体・器官・存在領域のつらなりにおけるこのアートマンは大主宰神（Maheśana）である」(7) 同様の比喩を用いて「……この様に内官が動くときにアートマンも動く」(S. 17) と述べ内官に反映したアートマンの動きは添性によると述べる。次に月食の神 Rāhu の例をあげ、「(普通) 見ることがないラーフは、月輪に現われる。この様に遍在するこのアートマンも知覚対象に留まることによって統覚機能 (dhī) の鏡に現われるのである」(8) この頌は、(S. 18) とは buddhi と dhī の用語の相違以外は類似している。9頌以下は Ādiśeṣa との類似頌はなく独自の理論が展開される。「顔が汚れなき鏡のなかに反映される如く、アートマン (bhārūpa) はシヴァ神の力の降下 (śivaśaktipāta) によつて清められた統覚機能 (dhītattva) において反映される」(9) シヴァ神の恩寵 (anugrahaśakti) をシヴァの力の降下という語で示し、鏡としての統覚機能の三つの汚れ、即ち、個我本来の無知に属する汚れ (āṇavamala)、個我にその微細・粗大身を与える māyā による汚れ (māyīyamala)、vāsana による汚れ (kārmamala) を示し、その汚れはシヴァの恩寵によつて除去されるとする。次にサーンキャの25原理を加えて36原理と定め、śivatattva 説明する「光輝き完全であり、自らのなかに休息するが故に最大歓喜であり欲求力と知識力と活動力をそなえ、無終の力で満ち、一切の区別 (vikalpa) を欠き、純粋で静寂であり生起帰滅のない最高原理である śivatattva の中に36原理よりなる世界が現れる」(10〜11) 注釈家は詳しい注釈をなしている、特にシヴァが最大の歓喜である理由は、完全で満された自己意識の喜びの情緒 (akhaṇḍāhantācamatkārarasa) のなかで自ら輝いているからである。また無活動 (nirvṛtti) でなく icchā-jñāna-kriyā という能力をもちシャンカラの説くブラフマンとは異なるのである。そして区別 (vikalpa) という汚れがない故に純粋であり、主客の相違より生じる動揺がない故に静寂であり、区別とは二つの「壺であるもの」と「壺でないもの」とを分離する場合、「壺でないもの」より壺の存在が区別され確かめられると定義する。「鏡の映像における種々なる町や村等は無区別であるが互いに異なつているように現れる、そのように、この世界は最も純粋なる最高 Bhairava の覚知 (bodha) と無区別であるが互いにそれ（＝覚知）と異なつているように現れる。」(12〜13)。と述べてシヴァによつて創造された世界とシヴァ自身との無区別を主張する。「五つの能力 (=cit-nirvṛti-icchā-jñāna-kriyā) の異なる様相によつて彼 (=Paramaśiva) は śiva と śakti と sadaśiva の性質と īśvara と vidyā からなる原理を顕現する」(14) と śivatattva より sadvidyātattva までの原理がまとめあげられている。śivatattva に関して注釈家は一切の知覚主体のなかにある完全なる自己意識の喜びからなるものであり、一切の原理を越えたものであり、無量の輝きの形をとるものが caitanya であり、これこそが śivatattva であると定義づける。以上が śakti の領域である。Ādiśeṣa との比較において、特に顕現説に関する両者の見解の相違が理解されるのである。

1　拙稿印仏研第二十八巻第二号参照。2　SK. Text. Abhinavagupta's Paramārtha sāra; K. S. T. S. (No. 7) 1916 を底本、Liliane Silburn: Le Paramārthasāra; Paris 1957. と L. D. Barnett: The paramārthasāra of Abhinavagupta; JRAS. 1910. p. 707〜748 を参照。3　(S.) は The Paramārthasāra of Bhagavad Adeseshа; T. S. S (No. 12) 1911. 4　S. S. Suryanarayana Sastri: Paramārthasāra; N. I. A 1938.

（日本学術振興会奨励研究員）